

木片をつないだ手の記憶

——子どもの思いを実現すること——

津 守 真

二月の暖い日、私は園庭にゆくと、五才児の部屋の前に、木工の机が出ていて、数人の子どもたちが木片をいじっていた。私が近づくと、M子がすっと私の傍にきた。瞬時に、私は娘たちが幼児だったころの柔い感触を思い出し、歩いてくる途中頭の中を占めていた抽象的な観念は消え去って、暖い陽ざしの中でこの子たちと楽しもうという思いに満たされた。M子は手に細長い木片と小さな四角い木片とを持っていて、この二つをつなぎ合わせるかと思っている。小さな手で釘を立てて金槌で打つのだがうまくいかない。

M子が二つの木片をつなぎ合わせたいと思っているのはわかるが、木片は分厚くて、子どもにはかなりむづかしい作業のように私には見えた。子どもの思いを何とか実現させてやりたいと思い、ボンドでつけたらと私は云う。すぐにM子は接着剤をとりについて試みるがうまくいかない。私は二つの木片を合わせて釘を打ち、ぐらぐらしない程度に金槌で打ちこんで、できるだけ子どもの作業の分を残し、そのあとは、いろいろの角度から私の指で支え、M子は釘を打ちこむことができた。思ったように木片が接合されて満足な様子だった。短い時間の、

恐らく他人には気付かれないことだったが、M子にとって、心に思ったことを実現した重要な時だったと、そのとき私は自負した。しかし、多くの場合、その重要さは保育者には確かめるチャンスはない。そして間もなく、そのできごと、そのときの子どもの名前も忘れ去られる。

それからしばらく、私はこの日のことを思い出すこともなかった。二週間程たって、私は訪問客を案内して付属幼稚園にいった。部屋の中で大人同士話していると、私の手に触れるものがあり、下を向くと、M子が私を見上げてにっこり笑っていた。私はM子が声をかけるのでなく、叩くのもなく、私の手にさわったことに感激した。M子にとって私は、木片をつなぎ合わせるのを苦心して手伝った手の記憶であった。私は、二週間前の木工で、M子が心の思いを実現したのであることを確認できたように思った。

あるときM子が木片をつなぎ合わせようとしていたのは、でき上がった形から判断すれば、船をつくらうとしていたのかもしれない。あるいは、この子どもは二つのものをつなぎ合わせることに特別な関心を抱いていたのかもしれない。紙片をセロテープでつなげるのではなく、木片を釘で接合しようとするのは、手ごたえのあるソリッドに現実の物をつけ合わせることへの精神的な意味をもった関心かもしれない。しかしM子にとって釘で木片を貫くことはすこしむづかしかった。私が最初の部分を打ちこみ、子どもの力に合わせて角度を保つことによつてM子になし得られるものとなった。子どもが思ったことを実現するには、最初はおとなが手助けし、そのうちに独力で先をつくり上げるようになることが多い。木片を接合することがM子の精神にとつてどのような意味をもつものだったのか、その時だけしかつき合っていない私にはよくわからない。この瞬間に云えること

は、M子は二つの木片をつなぎ合わせたいと思って苦心しており、それには助けが必要なことである。そしてそれを実現させることのできた過程は、子どもと私との間で力をあわせた相互性の感覚としてとらえられる。

保育する者にとっては、その感覚が自分の保育のあかしであって、それ以上の証拠は必要とせず、保育の実践ではそこまでにとどまるのが普通である。何週間も経って、そのひとときが子どもに記憶されていたのを知られるのは、稀に起る恵まれた機会である。この時の私の体験は、その点で貴重であった。

もうひとつここで顕著なことがある。それは、M子が私の傍にきたとき、私の頭から幼児教育についての抽象的な考えは消えて、子どもと共に過すことをたのしんだことである。私の中にはいつもこの二つの傾向が住んでいる。おとなの中だけにいると前者の傾向になる。子どもと一緒にになると、瞬時に後者の気持になる。M子が二

つの木片をつなぎ合わせたいと心の底から思っていることが私に伝わったのは、二月にしては暖い陽光にさそわれて、子どもと共に過す時をたのしもうという気持に私の心が満たされていたからだと思う。構えた教育の場ではこういうわけにはいかないだろう。

